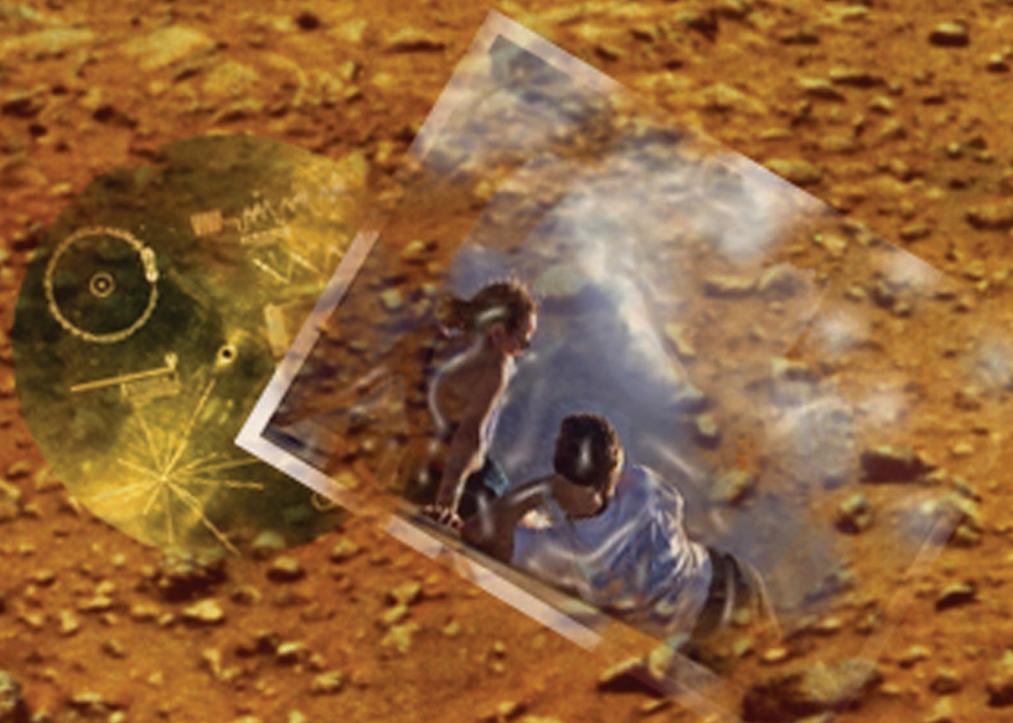


時代遅れのラブソング

高本淳



Anima Soralis

1 侵入軌道

「……妙だな」 ウィリアム・セイジはモニターを見ながら呟いた。

「何が妙なの？」 端末にかがみこんだ姿勢のまま、カシルが少しばかり苛立たしげに尋ねる。彼女は『朝』からずつと軌道修正プログラムの組み立てに忙殺されていた。

「いま出たスペクトル解析の結果なんだけど……。見たら吸収線がないんだ。見事なホワイトノイズを奏でてる」

カシル・セイジは身体を起こし、ウィリアムは展望窓から射しこむオミクロン・ディフェンダの光のなかで妻の東洋人風のほつそりしたうなじの周囲でセピア色の髪が散開星雲のシルエットをつくっているのを見た。

「それって……。ひよつとしたら全然大気がないってことじゃない？ 何かの間違いじゃないの？」

「うーん。ちよつと信じられなかったんで三度もチェックしたんだけどね」 当惑したときのクセで親指がその顎を無意識に擦り上げていた。

「あーあ、ウソでしょう？」 彼女は分厚いファイルを放り出し、それは千分の三Gの重力にひかれて狭い操縦区画のなかにとほうもなくゆるやかな放物線をえがいた。「……この道草のためにわたしたちが費やす時間は全部で七年になるわ。……七年よ！ それがまったくの無駄足だったっ

て言うの?」

夫は眉を寄せ、もったいぶった身振りゆつくり首を振った。

「無駄足なんかじゃないさ。まだあそこに『イシユタル機械』がないときまったわけじゃないんだし、何よりもロートンの計算式にあてはまる地球型惑星が大気を全然持つていないなんていままで聞いたことがない。その理由を知るだけでも大いに価値があると思うよ」

「それはいわゆる学術的価値ってやつでしょう、ウィル」カシルは溜め息をついた。

「わたしたちはシーカーなんだから、居住可能な惑星なり『機械』なりを見つけないくちや意味ないのよ」

G型太陽はまるで集蛾灯のように銀河中の『機械』を引き寄せる。しかしそこに地球型惑星がなければ、それらはすぐにでも立ち去ってしまったことだろう。わざわざ水素イオンの豊富な北方航路をはずれて向かったこの星系内に彼らが機能停止した古代の『イシユタル機械』——つまりティプラーとフォンノイマンの『機械』を発見する可能性はかぎりなくゼロに近い。

すこしばかり弱々しい咳払いとともに彼は言った。「いずれにしてもここで引き返す手はないさ。思いがけなく『機械』に出会うことだってあるかもしれないよ。頼むからプログラムをつづけてくれないか。ぼくには一時間かか

ることを君なら十分でできるんだからさ」

足許のリファレンス・マニユアルをウィリアムは妻に投げ返し、カシルはふてくされた様子でそれをつかんだ。

「ガンマ線で身体中しみとそばかすだらけになったうえに借金の返済に追われるみじめな老後生活なんて……。まったく冗談じゃないわ！」

確かにすべてが彼の発案だった。二人の現在の住居兼恒星間宇宙船である『機械』——カシルはそれを『オールドファッシュヨンド・ラブソング』と命名した——をレンタルするために政府に支払った保証金は膨大な額にのぼる。故郷サイラシンに残してきた彼らの資産を管理している代理人は恐らく利益をあげているだろうが——五百年後にクレイドル証券が消滅していないことをただ祈るだけだ——その運用益が借入金の脹らみ続ける元利合計を帳消しにするなんて僥倖は、熱力学の第二法則が破綻するよりさらに起こりそうもない。シーカーがリタイア後の堅実な生活を望むつもりなら最低数隻の『機械』を見つけ出さなければならぬし、ついでに政府庁舎の庭先まで持って帰ればさらに申しぶんがないのだが……。サイラシン時間で百八十五年におよぶ探求の旅にもかかわらず二人はまだひとつの『機械』にも出会えないでいた。ウィリアムにしてみれば十分採算のとれる事業に乗り出したつもりだったのだが……。

カシルはしぶしぶ再開した端末での作業にいつのまにか没頭し、タッチパネルの上では彼女の長く白い指が間欠的にあるいはリズムカルに閃いていた。ウィリアムはそれをいささか皮肉な、しかしほっとした微笑とともに眺めた。何のかのと言いながらも彼女が『シーカー』というこの冒険的山師の役割にまんざらでもないのがせめてもの救いだっただ。友人たちとのカクテル・パーティーやバザルリ半島での雨季の休暇から数百光年隔てられている現実をたまたに彼に愚痴ることはあっても……。

「さあ、これでいいはずよ」両手でモニター疲れの目を押えて端末を離れながらカシルが言った。「この絶滅しそこなった恐竜がどう反応するか見てみましょう」

ちっぽけな寄生生物、つまり人間の組み立てた侵入プログラムが数万年の星霜を重ねた巨大な宿主を意のままに動かして、音も振動もなく『ラブソング』は姿勢を変化させ始めた。テーブルのうえの磁性ペンがゆっくりと動きだし、ウィリアムはそれを胸ポケットにもどした。カシルは窓の外をすべる主星の光とモニターの画面とを代わるがわるに眺めていた。

「角度はいいわ」連続する遠雷にも似た轟きとともに軽い加速度の『引き』が感じられると彼女はコンソールの端で身体を支えながらカウントダウンの流れる数字を見つめた。「時間も完璧」低い轟きが消えふたたび静寂が戻ってくる

と彼女はそう言い、文句がある？とでも言いたげな視線を夫におくった。ウィリアムはすこしばかりオーバーアクションぎみな拍手でそれに答えた。

「つぎの軌道修正は十日後の予定よ。各惑星の摂動がまだ十分わかっていないから、スイング・バイはちよつと荒っぽいものになるのを覚悟して」カシルはすこし怒った口調でそう予告した。

三ヶ月後、その巨星は十五億キロという軌道半径にもかかわらず展望窓いっぱい明るく活発な大気の擾乱を見せるオレンジと赤の渦巻く巨大な壁となっていた。外惑星につきもののリングさえ、色とりどりの派手なやつを十本以上も持っている。……秒速十五キロ近い速度で遠ざかりながらも長い間、それは少しも小さくなったように見えなかった。……準光速からの一年以上にわたる継続的な減速のすえ、『ラブソング』は黄道面の北側——いにしえの決まりどおり右ねじの進む方向——からゆつくりと星系に侵入していた。『ゆつくり』——準光速に比べれば——とはいいながらも速度はまだ星系内にとどまるためには速すぎた。しかし電磁スクープの有効速度を下まわっている以上、貴重な重水素を無制限に制動のために使うことはできない。それは巨大なラムジェットエンジンの活動の産物であると同時に、それが使用できる速度まで『機械』を加速するた

めの燃料でもあったからだ。だが幸いなことにこの星系は彼らが重力ブレーキに使える重い外惑星を持っていた。カシルは『ラブソング』を巧妙にだましすかししながら、ウイリアムが『ホルスタッフ』と命名したその水素を詰め込みすぎたガス巨星に向かって誘導し、その結果巨大な惑星をその半径より短い至近距離で掠めながら二人はこの上なく素晴らしい眺めを特等席から見ることができたのだった。

もつともウイリアムは政府との契約に明記されていることもあつてこの惑星の測定記録の整理にあわただしく追いまくられていたし、カシルはカシルで未発見の惑星による振動に神経を尖らせていたから、眺めを楽しむ余裕は二人ともたいしてなかった。とくにカシルは神経質なまでに丹念に軌道をチェックしていた。黄道面は一応目をくばってはあるけれど、この星系にとんでもない軌道平面をもつ惑星がないとはかぎらない。近日点を目的の惑星の軌道半径に持つこの長楕円軌道という卵を、まるでウミガラスからそれを守る阿呆鳥の母親のように彼女は守っていた。

「この点で『ホルスタッフ』を通過したから……」カシルはモニター画面のグラフィックのなかの一点を指さした。「……遠日点にむかう軌道上のつぎの場合でもういちどあの星の重力を利用して運動量を取りもどせば最低噴射エネルギーで脱出速度まで加速できるわ。……ここから、この緑

のベクトルに沿ってね。計画どおりならラム駆動速度までの重水素はぎりぎり持つはずよ」

彼女は夫をふりかえった。「そのかわり逆行での遭遇になるから、あの惑星の表面には一週間ぐらいしかいられないけど……。それとも『ラブソング』が軌道を一周して帰ってくるまで三十一年間あそこで待つ?」

ウイリアムは肩をすくめた。

「一日でもあればクレイドルへの言いわけはたつき。何もふたりでアダムとイブになろうってわけじゃないんだから……」

「……七年かけた旅のはてに七日間の滞在というわけ……」

「ロマンチックでしかも印象的だね!」

「冗談やめてよ。船内時間で七年っていえば『機械』のフルスラストなら銀河系だって横断できる時間なのよ」カシルは無念そうだった。

このときになってもまだ彼らの目的地は『あの惑星』だった。いずれにせよ命名権は発見者のカシルにあり、彼女は古来からの作法どおりランディングに成功してから改めてそれを宣言するつもりなのだろうから、彼としては別段どうでもよいことのはずだった。しかし今回にかぎってウイリアムは、妻が自分にちよつとした面当てをしているんじゃないか?という小さな疑いを捨て切れなかった。岩と

砂ばかりの世界とわかつている星を呼ぶのになぜ彼女はそんなにも慎重なのだろうか？ 本来なら居住可能な地球型惑星へ着陸するときこそそうした心づかいが必要なはずだった。つまり侵入者である以上、そこに存在しているかもしれない知的種族がその世界をどう呼んでいるかをまず尊重すべきなのだから……。そして、そもそもそうした世界を見せることを約束したうえで、ウィリアムは気のすまない彼女をクレイドルからこの長い航海に連れ出したのだ。

……彼女はそうして暗に夫を非難しているのか？ あるいは彼女が惑星に命名することを拒んでいるのは、そこが不毛の土地であるという事実を単にまだ認めたくないからだろうか？ それとも星系への侵入にともなう緊張で自身がいくぶんナーバスで被害妄想的になっただけにすぎないのか……？ ウィリアムの思考はいくども堂々巡りをしたすえに、落ち着かない気分だけが空しく残った。

2 トラブル

「……なにをしてるんだい?」

下着姿になったカシルが頭を下にゆっくり回転しながら宇宙服に脚を通そうとしていた。

「回収システムの具合がおかしいのよ。貯蔵タンクのヘリウム四の割合がひどく高いの。コンピュータは異常なしといつてるんだけど……。おそらくレーザー発振器が不調なんだと思うわ」

「ふうーん……。ウイリアムは無表情に相槌をうった。

「いま直さなきゃならないの?」

「ランディングには『サガ』号の力を百二十パーセント引きだす必要があるわ。融合燃料がいくらあっても足りないぐらいよ」

「それじゃ、ぼくが行こう」

カシルは一瞬驚いた表情をした。

「あなたが?」

「覚えてるだろ? あの装置はぼくが特別注文したやつだ。悪友のひとりから中古の出物の話を持ちかけられてね」

「だから……。?」カシルは袖口の気密チャックをひっぱりながら尋ねた。

「だから、調子が悪い時にはぼくがけつとばしに行くべきなのよ」

「ウイルス？」

「なんだい？」

「あなた前に自分が一時間かかるものをわたしなら十分でできるって言ったことがあったね」

「ああ、そう言った」

「あなたとわたしとどちらがこの『機械』のシステムに詳しいと思うの？」

「そりゃあ、きみさ」

「それじゃ、どちらが微小重力での船外作業の経験時間が長い？」

「もちろん、きみだ」

「ふたりのうちどちらが小柄で、つまり酸素消費量が少なくてすむ？」

「うーん……ひよつとしたらきみかな？」

「そうした条件すべてを考慮したうえで、緊急の際にあなたとわたしとどちらが生き残れる可能性が高いと思うの？」

「……きみだよ」

それで議論は終わりだという調子でカシルは彼に背を向け生命維持装置に手をのばそうとした。ウィリアムは目の前の宇宙服の腰のストラップと首まわりのシール・リングを両手でつかむと、スツールの台座にからめた両脚を支点にして彼女を居住区画の反対側まで投げ飛ばした。

「ちよつと……。いったい何なの？」カシルは制御コンソールと緩衝壁の間に頭から突っこみ、ファイバーケーブルの束に絡まったまま怒りをふくんだ声をあげた。

「確かに、きみの言うことはすべて正しい……。そう認めるよ。でもぼくは行くつもりだしきみがそれを止めることはできないんだ。なぜならばくのはうが腕力でまさるんだからね」

「……なに寝言を言ってるの」

しかしウイリアムは手早く生命維持装置と宇宙服、そしてヘルメットをエアロックに押し込み、自分も中に飛びこむと内側からハッチを閉ざしてしまった。カシルは開閉スイッチに飛びついたが船内からは緊急装置を作動させないかぎり開かない。

「ウイル！ ここを開けなさいったら！」

「今着替えているところなんだ。覗かないでくれよ？」

「あなた『磁気トラップ』のことわかるの？」

「全然知らないというわけじゃないさ。それにヘルメットのカメラを通じてモニターでできるんだから通話回線で指示を与えてくれればいいじゃないか」

「なんでわざわざそんなややこしいことしなきゃならないのよっ。」

答えはなくウイリアムは装着した自分のヘルメットを軽く叩くと気密ハッチ越しに彼女の背後のコンソールを指さ

した。カシルは通話装置まで飛んでいくとスイッチを入れて尋ねた。

「なんでわざわざこんな面倒なことをするの?」

「……しゅーっ、はあ」

「ウィルっ……!」

「……しゅーっ、はあ」

彼は外側の扉がゆっくりと開くのを待った。漆黒の空と、そして眩しく輝く『機械』の側壁が見える。一瞬、惑星の地平線を見ているような錯覚にとらわれた。湾曲するカーブの端まではずか数十メートルの距離なのに……。ウィリアムは目をしばたきフェイスプレートのバイザーを下ろしてからゆっくりとエアロックの外へ漂い出た。左手で取っ手をさぐり、右手の命綱のフックをそこへ固定する。それから身体を回転させて扉の開閉レバーに正対させるとそれをひねった。

「ウィルったら!」

「しゅーっ。大きな声を出さなくても聞こえてるよ……」

「いつになく強引ね」

彼はバイザー越しに主星のほうを慎重に見上げた。

「なぜなの?」

「ちよっと問題があるんだ」

「何が?」

ウィリアムは『サガ』号の球形の船体の外周にそってゆつくりと移動した。エアロックと同じ高さの位置にいくつものパネルが並んでいる。彼はそのなかのひとつの前にくると両手で左右の取っ手を掴み、ゆつくりと引いた。パネルは背後の枠組みと一緒になめらかに引き出され、曲がりくねったパイプと小さなタンク、いくつかの黒い箱で組み立てられた装置たちが主星の光を反射して光った。

「何のことを言っているのかって、聞いているのよ」

彼は装置のひとつを枠組みから取り外し、クーラーの複合素材の外壁に押しつけた。マグネットの働きでそれは表面に固定された。

「……オミクロン・ディフェンダのデータを見てごらん」

「なんですって?」

「ここ一年間の主星の活動データさ。しゅーつ。ぼくのメモリーファイルに入っているよ」

ウィリアムはそのまま背中を向けて装置にもたれかかり、股と腰と肩の取りつけリングにそれぞれストラップを通して引き締め固定した。それから彼は命綱のフックを外し、一歩前に進んだ。マグネット・ロックが軽い抵抗とともに外れると彼は装置を背に少し前方に傾きながら立っていた。「ぼくはずつとこの星系に接近しながら……、しゅーつ。……継続的に観測してきたんだ。あの星はかなり活発に活動している」

「どうしてこうなの？」

両手を前に、自然に上げた位置にふたつのリングがある。彼はそのひとつを左手で握った。つぎに腰の近くにある黒い箱のひとつに右手を置いた。

「黒点の数が増えているんだ。つまりそれは……近いうちに太陽フレアが起こる可能性がかなり高いってことを意味している」

カシルは息を飲んだ。

「あ……、ウイル……」

「大丈夫だ。次の数時間のうちにおこりやしないさ」スイッチに触れると折れ曲がった背中のパイプの先端から目に見えないイオンの噴射が始まりウイリアムの身体は『機械』の船体を離れて上昇した。

「イルスター!!」センサーにX線と極紫外線量の測定数値を要求したカシルは、小さく罵倒の言葉をつぶやいた。

「もうはじまっちゃってるじゃないの?」

彼女は手早く生命維持装置をチェックし身につけた。つぎにヘルメットを取り上げたところで窓の外に目をやり、個人用推進装置を背負った姿が飛んで行くのを見てそれをかぶる手を止めた。それからあきらめた様子で彼女は通話装置のスイッチを入れた。

「ウイル。あなた嘘をついたわね?」

「しゅーっ。……え、何だって?」

「もうフレアは始まってるわ。すぐに戻りなさい」

「しゅーっ」

「ウィル!」

「……ほんとだ。警告灯が点滅している……。でも大した量じゃない」

「フレアは予想不能よ。いつシールドの限界を越えるかわからないわ」

「そうだ、あれは非線形力学的現象だからね。しゅーっ!」

カシルは遠ざかっていく姿を見つめながら歯噛みをした。

「危・険・だ・か・ら、戻りなさいっばっ……!」

「……ヘリウムが必要なんだろ。主星に近づけばもつとずつと放射線量は多くなる。今のうちなら大丈夫さ」

コンピュータ制御のジャイロスコープが自動的に姿勢を保ち、デリケートな操作に気を使う必要はなかった。ウィリアムはその軸線に沿って飛びながら『ラブソング』の全体を見るともなく眺めていた。『機械』は、……この速度で飛んでいる限りは、ゆっくりと回転している灰白色の様な材質からなる細長いシリンダーに見えた。そして、その幾何学的な均整を乱すように『サガ』号とその架台、船尾のヘリウム回収システムの質量分離偏向リングがある。さらにそれを支持するフレーム構造がふたつ。ひとつには電磁トラッピング装置とその制御ユニットが納まり、……

もう一方はからっぽだった。普通は最低でもふたつは設置すべき回収装置が『ラブソング』にはひとつしかなく、しかもそれがしょっちゅう調子を狂わせている中古再生品なのだ。それは彼らの星々への旅立ちがかなり逼迫した経済状態のなかであわただしく行なわれたことを物語っていた。ウイリアム自身はかなり寛大な美的造形感覚から言っても、完成された生命体を思わせる『機械』——それは何よりも二四六億倍に拡大されたタバコモザイク・ウイルスに似ていた——に比べて、後から間に合せ的に作りつけられたこれらの装置類はいかにもみすばらしく醜悪だった。

数分の宇宙飛行でウイリアムは回収システムの制御ユニットの傍らに降りたつた——と言うよりも、ようやく流れ着いたと言ったほうがいいかも知れない。彼は個人用推進装置のあつかいは得意でなかった。命綱の取り付けに幾度か失敗したあげく、ウイリアムはスラスタを手近の壁に磁気固定し、点検用の手動ハッチを開いて注意深く頭から装置のなかにもぐりこんでいった。ハッチの内側は宇宙服を着た人物がぎりぎり動き回れるだけの余裕しかない。彼はヘルメットの照明灯の光に照らし出された狭い空間の中央に浮かんだまま、つぎに何をなすべきかを思い出そうとしていた。ようやく思いついてまずウイリアムは放射エネルギーをチェックした。ラムジェットエンジンが噴射するプ

ラズマには中性子が含まれているのだ。満足した彼はつぎに胸にある通話装置から細いケーブルを引き出し、その先端のプラグを壁のソケットに差し込んだ。

「聞こえるかい？」

はっとした気配。

「ええ。聞こえるし、……見えるわ。ウィル」

「今ぼくは何を見ている？」

「主電源パネルよ。レーザーの調整パネルはあなたの左側」「おーけー、いまそっちを向く」カシルは夫の頭の動きに同期して揺れ動く画面を見ながらひとまず安堵の溜め息をついた。あの中ならほとんどの放射線はふせげる。なしに『機械』の全力噴射から電子機材を守るように設計されているのだから……。

「まず波長をチェックしてみてください？ 冷却用レーザーの同調があまくてヘリウム三が磁気トラップを漏れ出しているんだ、と思うの」

ふたりはそれから数十分のあいだ冷却システムの複雑なプロセスのあちらこちらを点検した。最終的に制御パネルの回路プレートのひとつを予備のそれと交換し、カシルは作業の終了を宣言した。

「いまから戻る」カシルはモニターの数値を振り向き、それが変化していないことを確認した。

「放射線量は同レベル……。寄り道しないでさっさと帰ってらっしゃい。後でいろいろと言いたいことがあるから……」

ウイリウムはヘルメットごと首をすくめようとしたがそれは無理だった。通話用のプラグを外すと彼は酸素の残量をチェックし、クロノメーターを見た。

「……問題なし」彼は帰ってからのひと悶着を想像して苦笑いしながらハッチを通り抜け、なおも笑みをうかべたままスラスターを背負った。操縦リングを握り、噴射始動スイッチをオンにした瞬間に、しかし彼のその表情は凍りついた。

「カシル……」彼は静かに言った。

「……か言った？ 雑……が多くてよく聞き……れないわ」
わずかのあいだに無線通話の状態がひどく悪くなっているのにウイリウムは驚いた。空電雑音……？ 何か心にひっかかるものを感じながら、それをひとまず無視して彼は答えた。

「まいったよ……。スラスターが故障だ。噴射しない」
「……ですって？ ……大変だわ……」

彼は何度も始動スイッチを押したが、それは死んだ鳥を生き返らせ飛ばそうとする努力にひとしかかった。

「今……行くから、……遮蔽の……に入っているのよ」

ウイリウムは背負った装置を外し、宇宙空間に腹立ち紛

れに放り捨てようとして思いなおし、結局それをそつとハツチの脇に置いた。それから彼はいま出てきたばかりのハツチのなかにふたたび引き返した。……たしかに自分は電子装置たちとあまり相性がよくない。コンピュータのあつかいは大の苦手だったし、専門分野の観測装置だって何か測定しようとするちようどその時にかぎってしばしば故障したものだ。しかし今回はあまりに運が悪すぎるような気がした。こうした船外活動のための備品は何重にもフルプルーフが工夫されていて、めったなことで壊れたりしないはずなんだが……。

突然、彼は呻き声をあげた。

「そうか……！ だめだ、カシル。外へ出るんじゃない」

「……何ですって？ 何て……つたの？」

彼はあわただしく回線を接続した。「外へ出るなって言っただ。……きみがスラスターでやって来たら二人とも立ち往生してしまうぞ」

「何を言ってるの？」

「……『陽子イベント』だ。すっかり忘れていた……。スラスターをひなたに置きっぱなしなんて、この間抜けが」

「ウィル。ねえ、大丈夫？ 頭がどうかしたんじゃない？」

彼は狭い空間で急に身体を伸ばし、ヘルメットを頭上のパネルにぶつけた。

「よく聞いて……。……恒星のフレアはごくたまに大量の

荷電粒子をとまなうことがある。電離した水素原子が主成分なので『陽子イベント』と呼ばれるんだけど、こいつは恒星の周囲の宇宙空間に強力な磁場をつくるんだ。それが『機械』のそれと衝突すると電磁的な一種の衝撃波を発生する。それがこの空電をとまなう受信障害の直接の原因なのさ。そのうえ、この陽子の突発的な発生は電子部品に致命的なダメージを与えることが知られている。昔、地球では陽子イベントのために航空機が墜落することさえあったんだ」

「……つてことは？」

「スラスタのジャイロ制御用のコンピュータがパンクしちゃったに違いないよ。だから安全装置が働いて噴射しないんだ。そっちにあるやつもロッカーに収納されているうちはいいけれど一度外へ出してしまおうと……。だから絶対に使えんじやないよ」

「スラスタが使えないなんて……。いったいどうすればいいの」

「歩いて帰る」

「冗談言っている場合じゃないわ」

「冗談じゃない。……ほかに方法がないんだよ。幸い……」
ウィリアムは生命維持装置の表示を見た。「酸素はまだ一時間は持つ」

「放射線のことを忘れてるわ。現在のレベルで三十分以

上さらされたら生命にかかわるわ……」

「心配ない。『機械』の内部を通って行く」

「ウィル！　十キロはあるのよ。それに……」

しかし彼はすでに通話プラグを引き抜いていた。

3 イシユタル機械

そのデザインの原型であるタバコモザイク・ウィルスが
そうであるように『機械』は十六等分したクリームチー
ズ・ケーキの一片によく似た構成単位が規則正しく並んだ
螺旋構造を持っていた。正確に言えばその構成単位は十六
分の一よりは少し大きく、したがってそれらは中心軸のま
わりに互いに巻きつき方の異なる二種類の螺旋を作ること
になる。……巻きつきかたの浅い螺旋をたどるか、それと
も深いほうをたどるか……、ウィリアムの場合それは生と
死の違いを意味していた。

頭で想像するうちはそうした構成単位間の溝をたどるの
はたやすいことのように感じられる。しかし、ひとたび
『機械』の身体の奥深くもぐり込み、その非人間的な
巨大さの本当の意味を理解した者は、このレバイアサンの
体内で道を失い途方にくれている自分を見出すだろう。：
ほとんど重力のない闇のなかでヘルメットの照明の照ら
し出すわずかな手がかりをもとに位置や方向の感覚を保つ
ことはどんな人間にも不可能だった。

ウィリアムは『機械』の表面から下り始めてじきにそれ
を痛感した。幅三メートルほどの『クレバス』にも似た構
成単位の隙間に浮かぶ彼の身体の、前にも後にもあるいは
頭上にも、同じように単調な灰白色の壁が光の届く範囲の

外へどこまでもひろがっているだけだった。足の下に目をやればわずかに星々が、そして主星の光に照らされて眩しく輝く外壁の一部が見えるものの、それもやがてオーバーハングする曲面に隠れて、周囲のすべては完全な暗闇に沈んでいった。

「しゅーっ、はあ」

自分の呼吸音を聞きながら彼はひたすら進んだ。炭素結晶素材にはマグネットもきかず、その表面には人間のための手掛かりになるものは何もない。いましがみついている断熱パイプをうっかり手ばなして空中に漂いだしたなら、その場に浮かんだままどうにも身動きがとれなくなるに違いない。……液体ヘリウムを星系内クルーザーの貯蔵タンクに送っている直径十数センチのこのパイプラインだけが今やただひとつの命綱だった。……『ラブソング』を改装した造船工場の技師がひいた設計図面をウィリアムはもうすっかり忘れてしまったけれど、このパイプラインが——あまり遠回りをせずに——自分を『サガ』へと導いてくれることを彼は心から祈っていた。

時おり手を休め——分厚い手袋をした手では細いパイプの継ぎ目を手掛かりにすることはできず、彼は両掌でその円管を挟んでは反動をつけて全身を前に投げ出すという非能率な方法で前進するほかなかった。そうした不自然な運動に両肩の筋肉はたちまち音を上げ、冷却液循環システム

にもかかわらず宇宙服の下はぐっしりと汗をかいていた——ウィリアムはあえぎながら酸素残量と経過した時間とを調べた。壁を下り始めてすでに五分近くを費やしていた。……酸素消費量も予定より多い。

そうしたつかの間の休憩と果てしない苦役とを幾度か繰り返したすえ、ついに彼はパイプラインがそこから直角に曲がる地点に到着した。無益と知りながらウィリアムは前方に続く何キロもの闇を透かし見ようとした。

……しゅーっ、はあ。しゅーっ……

灰色の壁に挟まれた底無しの峡谷が静寂と暗黒のなかをわずかなカーブを描いてどこまでも続いている。……彼は少し寒気を感じて宇宙服の温度を上げた。生命維持装置の燃料電池はたとえ彼が死んでも数十時間は体温を保つだろう。ヘルメットのランプももう何も見ることもない彼のためにいつまでも闇を照らし続けるはずだ。少なくとも暗闇で死ぬことだけはなさそうだ。

とはいえこの時点ではウィリアムは酸素の切れる時間内に『サガ』に戻れることを樂觀していた。何と言っても彼の行程は『下り』なのだ。……『機械』の質量によって生じる重力加速度はこのあたりではわずか毎秒毎秒十分の一ミリにすぎないが、それでもそれは一分間に数十センチ、一時間では数キロの落下を意味する。最後の三百メートルの垂直の登攀をのぞけばかなり早いペースで進めるはずだ

と彼は計算していた。

しかし実際に進みだすとすぐに問題が起こった。構成単位の間のクレバスをパイプが渡る場所——それはだいたい彼が三十メートル進むごとに会うことになるわけだが——途中に必ず直径一メートル、厚さ三十センチほどのリングがはまっていくのだ。……まるでそれはパイプを敷設した技師たちがウイリアムの生命をかけたレースをより興味ぶかく面白いものにするため取りつけた障害物のようだった。彼は身体ごとそれを乗り越えなければならなかったが、身体が漂い離れないようその都度両腕でリングをしつかりと挟んでいする必要があった。もしもその過程でちよつとでもバランスを崩して手をすべらせたなら今度はパイプ自体に手がとどかなくなり、ウイリアムはこのレースを——そして彼自身の生命を——失ってしまうことだろう。

……どうやら通信用ケーブルをたどったほうが賢明だったのかも知れない。腕の筋肉は熱をもったようにだるくなり、前を見続けようとすると努力で首筋はしこりのようになくなった。さらにヘルメットのなかを浮遊する大きな汗の玉で目をくらまされ、……彼ははるかな昔からずっとこの苦行を続けているような気がしてきた。暗闇のなかでの激しく、しかし単調な運動の繰り返しのために頭が半分麻痺してきて、都合の良いことに彼は迫りくる窒息という運命への恐怖をしばしの間忘れることができた。

……視野のなかで何かが動いた。彼はとっさにはその意味するものを把握できず、そのまま数メートル前進してから急に我にかえり、その場でパイプにしがみついたまま息をひそめた。ちようど『ねずみ返し』のリングの手前、交差するふたつの峡谷の中間地点に身を守るものひとつなくウィリアムは無防備に浮かんでいた。ふたたびライトの光のなかに数本の巨大な脚がゆつくりと現われて消えた。それは気味が悪いほど生あるものの動きに似ていた。しかしこの金属製の節足動物たちはその住まう世界とおなじく電子回路を持った無機的な存在なのだ。

「……なんで、こんなところに……」

ウィリアムは荒い呼吸とともにつぶやいた。それは『機械』の補修作業のための可動ユニットであり、本来ならここから数百メートル『下』、——主軸を取りまく基盤上に生息しているべきものだった。

「しかもこんな時に……」

たしかに運の悪さを嘆いてもよかった。……長い旅を通じて彼、ウィリアムがこれらのユニットと直接出会うのはこれが初めてだったのだ。通常それらは人間の踏み込むことのない『機械』の身体の奥深くにいて、今となっては誰ひとり理解できない複雑なシステムの不可解な自己修復機能に関係しているのだ。

「わたしたちは自分たちが『機械』を支配していると錯覚

しているけれど……」

脳裏にいつか耳にしたカシルの言葉がよみがえった。

「本当はごく表面的な部分をコントロールしているだけなの。考えてみて……。それはティプラーとフォンノイマンが予言したあの『万能機械』、自己増殖するテラフォーミングマシンなのよ。その基本原理を産み出し、それらを設計し、そして実際に建造した地球時代の技術はすでに失われてしまった。それらの本当の能力をわたしたちはまるで知らないわ。……わたしたちはただこうした太古の『機械』たちの機能停止したシステムのほんの一部を生き返らせ、わたしたちに都合がいいように利用しているだけ……。数万年の時を生きてきたこの人工知能はそんなわたしたちの存在を本当はどう思っているのかしらね。ときどき思うことがあるの。このシステムの無数の論理素子の奥深い迷宮のなかでいったいどんな衝動や思考が密かに進行しているのかなって……。……それを考えると恐ろしくなって夜眠れなくなることもあるわ」

そしていまウィリアムはそんな話を聞いたことを後悔していた。この古代の静寂に包まれた闇のなかで彼はその遙かな歴史を持つ種族のひとりと向きあっているのだ。そのうえ彼の立場はちょうどキラーT細胞にとっての抗原バクテリアにほかならなかった。『イシユタルの機械』の身体にとって、彼―ウィリアムは機能を阻害する異物でしかな

く、当然『免疫システム』はこの異物を排除にかかる。…
：彼らの『サガ』号とそのバックアップのための装置類は
前もってシステムの一部を書き換えることで仮の免疫性を
獲得している。しかしそれらを遠く離れ、単独でこんな場
所にいる宇宙服の人間を、このユニットがどう判断するか
予想することはできなかつた。『機械』の正規の部分とし
て、あるいは別の可動ユニットと見なして無視してくれる
かも知れない。しかし逆にシステムに危険を及ぼす要素と
判断されて排除されるかも知れないのだ。そうになったら行
き先は『機械』の物質循環サイクルの行き着く先——分解
炉に決まっている。

…両手が痺れてきてパイプを持ち直そうとしたその拍
子にヘルメットの光が動いてその触覚の先のセンサーをか
すめた。彼はそれを知って凍りついたがすでに遅かつた。
可動ユニットは球形の身体から放射状にはえた無数の脚を
動かしてウイリアムのほうに近づいてきた。暗闇のなかで
巨大な異形の怪物が襲いかかってくる……。まさに悪夢だ。
圧倒的な恐怖がウイリアムを金縛りにした。見開かれた目
の前でさしわたし半メートルはありそうなマニピュレータ
のグロテスクな挟がヘルメットをわし掴みにするように大
きく開くのが見えた。…しかしそれは彼の頭の数センチ
手前で止まり、強力なその手首が当惑したようにに左右に
振られ、そして引っ込められた。

『節足動物』はまるで心を決めかねて迷っている様子でしばらく身動きしないでいたが、やがてその脚をリズムカールに蠢かし始め、炭素結晶材の壁面をわたる巨大な蜘蛛さながらに闇のなかにその姿を消した。残された小さな宇宙服姿はしばらく硬直したまま呼吸すら止めていた。やがて身震いをひとつし、酸素ゲージに目をやると、思い出したようにまた尺取り虫のような前進を開始した。

永遠の時間が流れ、酸素ポンベなどつくに空になったと思う頃、ウィリアムのたどるパイプは再び直角に折れ曲がった。『上』へと延びるパイプラインを見上げもう彼は酸素ゲージを見ようとしなかった。……それが残量ゼロのすれすれ近くを示していることはもう間違いない。そしてこの『機械』の表面へと延びるパイプの先にもし星系内クルーザーがなければ——そこにはただ圧力を高めるための中継ポンプステーションがあるだけかも……………。

「…………いやいや」彼は明白な事実に思いあたり頭を振った。超流動のヘリウムにポンプは必要ない。そんな初歩的なことも忘れているなんて……もう酸素不足が脳に影響を与えはじめているのかも知れない。

いずれにせよ——これらのパイプがどこをどう通っているか、ウィリアムはいままで気にもとめていなかった——すぐ上にクルーザーがなければ彼は死ぬのだ。『機械』の回転にもかかわらず三百メートルの絶壁は毎秒毎秒数ミリ

の加速度でそこを登る者を引きずりおろそうとしていた。いままでもまして必死の努力で彼はパイプラインを手繰りよせ、また手繰りよせた。棒のようになった両腕やヘルメットを満たす汗の液滴もはや気にならず、ウイリアムは最後の力をふりしぼってひたすら壁面を昇り続けた。

彼はいつ壁を登り切ったか覚えていなかったし、再び眩しい陽光のもとに出て目の前に『サガ』号を見たときいったい何を思ったかそれも覚えていなかった。ただ生命維持装置の酸素はすでにつき、残りはヘルメットの中の数リットルだけで、しかもそれも急速に汚染されつつあることはわかっていた。ウイリアムは大きくあえぎ、繰り返し繰り返し肺に戻って来る炭酸ガスのためにほとんど失心しそうになりながらも、ただエアロックへの道をよろめき歩いていた。すでに架台から磁気ブーツのかかとを引き剥がすだけの力も残っていないかった。そして彼の目の前に黄やだいたいや紫の斑紋が見えはじめ、やがてすべてが暗闇に沈んで……。

……緊急装置のすさまじい轟音と旋風のなかで彼は気づいた。新鮮な酸素を含んだ空気が爆発的に顔面に吹きつけ、彼はあらためてもう一度窒息しそうになって大きくあえいだ。青ざめ恐ろしく緊迫した表情のカシルの顔がそばにあ

った。その黒髪がエア・ダクトからの強風になびくのを彼はほんやり見つめた。

「……痛い」彼はそう言い、頬を激しく叩くカシルの腕をつかんだ。

「……なんで殴るんだ？」彼は呟き、それからようやく彼女が夫の脳が無酸素状態でそこなわれなかったかを心配していることを理解した。「……おーけー。カシル、大丈夫だ。前と変わらずに間抜けだよ」

カシルは唇を噛み締め、顔をくしゃくしゃに歪めて、ほっとしたように身体の力をぬいた。ウィリアムは身を起し内側のハッチを押し開け、懐かしい船内へと漂い出た。

「もうだめかと思ったわ」

カシルの蒼白な顔にはつきりとそばかすが浮かんでいるのに彼は気づいた。

「パイプラインの端であなたの腕をつかんだとき全然反応がなかったから……」

「きみがぼくの腕をつかんだって？」

ウィリアムはほんやりと繰り返した。彼の記憶ではクルーザーの周囲に人影はなかったし、彼は自分だけの力でエアロックにたどり着いたはずなのだ。……しかし考えてみればカシルがエアロックの外側の扉を開けて……おそらくは宇宙服を着たうえでその外側で……、クロノメーターを見つめながら彼を待っていただろうことは間違いない。縦

溝を昇りきる彼の姿を見た瞬間、彼女はニュートリノなみのスピードですっ飛んできたことだろう。あの最後の光景はすでに十分な酸素を補給されなかった彼の脳の見えただけに違いなかった。

ふたりは互いの腰に腕をまわし頬をよせあつて空中に浮かんでいた。

「あなたはたまたまビーコンの近くにいたのよ。パイプラインに作業ユニットを近寄せないためのね」

「ビーコンってあのリングかい？ 直径一メートルぐらいの」

「そう」

「ぼくはただの障害物だと思っていた。誰かをパイプラインで遊ばせないための……。それじゃ、あれのおかげで分解炉行きをまぬがれたってわけか？」

「運がよかったわね……。そればかりじゃないわ。あなた宇宙服の温度を上げてたでしょ。知っててやったの？」

「どういう意味だい？」

「ああした緊急の場合、ひとつの方法は生命維持装置を手動解除して酸素の供給量をしばらくすることだわ。でもそれは十分経験をつんでいないと逆に危険なの。……つまり低圧力状態で激しい運動を長く続けていると急に意識を失ってしまふ可能性があるから。一種の高山病ね。それに代わるも

うひとつの方法は温度を上げることなのよ」

「へえ……」

「温度が上がれば服の圧力も上がるわ。すると調整弁が自動的に作動して酸素供給量が押えられる……」

「気づかなかった」

「間抜けね……。もちろんごくわずかな量だけれど、引き伸ばすぐらいの効果はあったはずよ……。最後の一分をね」
「寒がりが幸いしたってわけか」

ウィリアムは妻の背中の腕に力を込め、その髪の毛をもっとよくかごうとした。しかし彼女は上体をそらし、彼の腕からすりぬけるそぶりをした。

「……？」彼は一転して堅い表情で妻が自分を見ていることに気づいた。

「どうしたの？」

カシルの腰がウィリアムの下半身を軽くさすりながら半転した……。そして彼女は足をからめた配管を支点に夫を一本背負いでももの見事に投げ飛ばした。

「うわ……！」

「……確かに腕力はあなたが上。でもわたしには『ジュードー』の心得があるのを忘れないで……。そのうえでこれから危険に飛びこんでいくのがどちらか決めるときに自分勝手が出来るかどうか、どうぞ試してみたらいいんだわ」
「……一体何が言いたいんだ？」

ウィリアムは緩衝材にいやというほど頭をぶつけて目を白黒させながら尋ねた。カシルは一瞬、胸に息をすいこんだが、やがてゆっくりそれを吐き出した。

「……何が言いたかったか忘れてしまったわ」

カシルは彼に背を向けた。その肩がかすかに震えていることに気づいてウィリアムは言おうとした言葉を飲みこんだ。

「……通話回線でヒステリックに泣き叫ぶだけの馬鹿なヒロインの役目を押しつけられたのが我慢ならなかったのかも知れないね。……とにかく、最後の一分。あのエアロツクの外であなたの姿を見るまでの時間……。あんな経験はもう二度とするつもりはないわ。断じて……!」

カシルの髪が逆立っているのをウィリアムはあっけにとられて眺めていた。それは必ずしも無重力のためだけではなく、彼はびっくりすると同時にいささか恐れをなした。

4 『サガ』

「まるで真珠みたいだわ。……百万キロ離れて見た金星はきつとこんなふうよね」

スイング・バイから二年の後、遷移軌道を自由落下する『サガ』号の展望窓からカシルは惑星を眺めていた。主星は並んで浮かんでいるかれらのほほ足の下の方向にあり、見上げる天頂近く、『サガ』号に毎秒四分の一πラジアン
の回転が与えられているためにその純白の星は漆黒の深みを背景に眩しく輝きながらかすかな円弧を描いていた。

「見たことあるの?」

「金星を? それとも真珠のほう……?」

話題が思わしくない方向に行きそうな予感がしてウイリアムは首をすくめ、妻の注意をわきにそらすべくモニター画面を指さした。

「探査ロボットの画が届いたから見てごらん」

カシルは展望窓からモニターへと眼をうつした。拡大された映像はあきらかに滑らかで完全な球体の幻想を裏切っていた。画面の左上半分は不規則に褶曲した複雑な地形で、斜めからの光がくつきりとした陰影をつくっている。対照的に右下半分には明るい単調な白い平原がひろがっていた。「すごく反射率が高いわね。氷かしら……?」

「……わずかだけれど氷もあるようだ。……両極の汚れた

灰白色のところがそうさ。でもあの真つ白な部分は……」
モニター画像に顔を近づけて細部を調べていたカシルは小さな驚きの声をあげた。

「……まさか？」 ウィリアムはうなづく。

「いまカメラは赤道の少し上にある小さな丘陵の北西端をうつつだしているんだ。暗い部分のほうの地形はあきららかに侵食されている」

タッチパネルをなぞる指の軌跡がモニターのなかを動いた。

「ここから白い平原まで浅い溪谷が続いているね。……きつと昔は川だったんだと思う。その河口の付近、……ここだ。暗い領域の縁にそって幾本か明暗の筋が見えるだろ？ あれは海岸線から海が次第に後退していった跡に違いない。つまり丘陵はかつての島であり、白い平原は干上がった大洋底に蓄積した岩塩の層なんだ」
「……ってことは、昔この星には豊富な水があったってこと？」

「ああ……。しかもそんなに昔のことじゃない。……クレターがほとんど見えないことから考えて、ごく最近まで大量の海水と、そして大気があったことは確かだ。……恐らくここ千年以内に何かがおこったんだろうね」

「いったい何がおこったっていうの……？」

ウィリアムの沈黙はそれを知らないと言っていた。しば

らく二人は黙ったままモニター画面を流れていく荒れ果てた地表を眺めていた。平坦な海が深い海溝部分を挟んで、大陸棚に、さらに内陸山脈へとかわって行く。曝首を思わせるモノトーンの地形は絶対三度の真空と宇宙線の直撃にさらされ、苛酷な主星の炎にじりじりと焼かれていた。

「火山活動は見られない。全般に地形はなだらかだし……。すでにマントル対流のエネルギーを使いつくしてしまったのかも知れない。こいつは古い惑星なんだよ」

来るのが少し遅すぎたようだった。恐らくは数千年ほど……。もしも今でもこの惑星が新鮮な大気と豊かな水を持つ星であったなら……。互いの思いは口にださなくともはつきりとわかった。彼らの、そして人類の長い探求の旅はここで終わっていたのかも知れなかったのだ。

「……変ね」暗然とした顔つきで地表を眺めていたカシルは、やがてふいに言った。「あそこを見て」

彼女はモニターの画面、ひとつの『川』が幾つもの支流に枝別れして『海』にそそぎこんでいる場所を指さした。

「あの赤道上の河口の周囲にうつすらと塩の堆積が見えるでしょ。ほら河岸であるはずの土地の上にまで」

「うん、見える。……昔は潮侵をうける土地だったんだろうね。アマゾン川の河口部分みたい」

「そう！ わたしもそう感じたの。アマゾン河口によく似てるって……」

彼らのうちのどちらもその惑星の地形の細部にいたるまで目に見るように思い出すことができた。……政府庁舎の前庭に置かれた巨大な地球のホログラムのまえで長い瞑想とともに佇んだ経験のないクレイドル市民などはない。台座に書かれたあのツイオルコフスキーの言葉とともに、その青い星の映像は彼らの脳裏に刻まれていた。

「それがどうかしたの?」

「何言ってるの。……この星には月はないのよ」

「げ……」ウイリアムはうめいた。

「潮侵が起きるはずないでしょう?」

「うーん。……季節的な水位の変化は?」

「赤道と黄道面は一致しているわ。軌道もほぼ正円だし……」

「……それじゃあ地殻変動で浅い湾が持ち上がったんじゃないかな。そのあとで川の流れが土地を侵食した……」

「ほんとうにそう思うの? あなたこの星はマントル・エネルギーを使いつくした惑星だって言ったばかりじゃない」

ウイリアムは答えようとして口を開き、そして閉じた。しばらくして彼は言った。

「……何か説明がつかさ。きつと……」

操縦区画の明りは消され、地球から見た満月の四倍ほど

の大きさを輝く白い惑星の光がつややかなコンソールパネルに反射していた。操縦区画のただ中にネットを張って、カシルとウィリアムは青ざめたその光に照らし出され、生まれたままの姿で浮かんでいた。微弱な遠心力が二人の身体を荒いネットの網の目に軽く押しつけ、絡み合わせた互いの腕をゆるやかに解きほぐそうとする。緊張のあとの心地よい弛緩のなか、乳房の横に頬を置いて胸郭の奥深くの鼓動をうっとりとして聞いていたウィリアムは、妻の身体の動きを感じて夢うつつの状態から現実にはひき戻された。

「どうしたの……」彼の問いを無視して、カシルは半身を起こしたまま頭上を見つめていた。

「確かに見えたわ」しばらくして彼女はつぶやくように言った。

「……なにが？」もう一度忘我の淵へ戻ろうとする努力をあきらめてウィリアムは尋ねた。こうなってはどうせしばらくは眠れそうもない。妻の背中に腕をまわしそのすべすべした感触を楽しみながら彼は共に星を見上げた。

「何をみたんだい？」

「光を……」

「光……つて？」

カシルは腕を指し上げ、なめらかな白い肌とブレスレットが冷たい星明かりにきらめいた。

「あそこに深い谷間があるでしょ。……あの暗い部分、た

ぶん大陸だったんでしょうけど……。あの縁にそったところで何かが光ったように思うの」

ウィリアムはちよつとの間その地点を探していた。

「海溝だな。確かかい？ 眠っていたんじゃないの？」

カシルは彼の腕をほどいた。「いいえ……。確かに見たわ。白い、……。鋭い光だった」

「反射じゃないかな。何か露出した金属の層があるのかも知れない。海溝部分ならありそうなことだ」

カシルは首をふった。「いいえ、違うわ」

「なぜわかる？」 彼女はウィリアムを振り向いた。影になって表情は見えないが、彼はその瞳が闇のなかで幾度か濡れたように光るのを認めて妻の気持ちのたかぶりを知った。「どんな金属もあんなに強く光を反射することはないわ。あれは、きつと……」

「あれは、きつと？」

カシルは声をひそめた。「何かの信号よ」

ウィリアムはあらためて起き直った。どうやら簡単にかたづく問題ではないらしい。

「……それが人工のものだったって思うの？」

「たぶん」

「信号って……。そいつは規則的に点滅していた？」

「いいえ、一瞬光っただけ。……。数秒のあいだかしら」

「色は白？」

「そう言ったでしょ」

「いいかい？」彼はカシルの腕を掴んで振り向かせた。彼女はまた惑星を目で追っていた。

「おーけー……。仮にあの惑星に知的生命が存在し、そして、きみの見たその光が人工的なものであるでしょう。…でもそれがぼくらへのメッセージであることは、ちよつとありそうもないよ」

「どうして？」

「なぜなら、ぼくたちはまだあの惑星から二十万キロ以上離れている。しかもぼくらは『太陽を背にして』近づいてるんだ。つまりあの星から『サガ』号を見ても昼の空に望遠鏡を使ってかすかに見える暗い星でしかない。……一方、探査ロボットのほうは二等星ぐらいの明るさで地表からも肉眼ではつきり見えるし、夜空を急速に移動する天体として、あの世界を周転している人工の衛星であることがすぐにわかる。もしもきみがああ星の住人であり、宇宙からの来訪者に自分たちの存在を知らせたいとしたら、いったいどちらに信号を送る？」

カシルはためらった。

「……でもあれが単にロボットで、こちらが本体であることを知っているのかも……」

「それならよけいに、それが観測カメラなり何なりの……『本体』に地表の情報を送るための機材を積んでいないは

「さすがない、と推理できるはずさ」

「そうね……」

「にもかかわらず、探査ロボットは一度もその光を観測してない。少なくともいままでのところは……。だから、それが知性に基づいたものであるよりはむしろ自然現象であると考えたほうがいいんじゃないかな」

カシルは溜め息をついた。「確かにそうね……」

ウィリアムはふたたび腕を伸ばし彼女も今度はおとなしくそれに抱かれるにまかせた。

「でもほんとうに強烈な光だったわ。まるで全部の波長で輝くレーザーみたいに」

「ふむ。あの星の住人がパルスレーザーでこちらを撃ちおとすために狙っているのではないとすれば……他に考えられる可能性は長焦点のパラボラ鏡で主星の光を反射させていることぐらいかな……?」

ウィリアムは妻の身体の反応にあわてて言った。

「だが、それならとづくに探査機が見つけてなきやおかしい。……そんな巨大な反射鏡を良好な状態にメンテナンスするためにどれだけ大規模な設備が必要だと思う?」

しかしそれでもやはりカシルは、寝返りをうつと『ネット』の合わせ目を探ってそれを抜け出し、コンソールのひとつへ漂い降りていった。

「いずれにしてもあの地点を探査ロボットにインプットし

ておくわ。朝までに詳しい地形のデータを作成しておくように……。ひよっとしたらつぎの発光現象を記録できるかも知れないし……」

きみの見間違いじゃないのかな。……コリオリの力にかまれて、しどけない姿で半転する妻の裸身を眺めながら、ウイリアムはそう言いたい衝動を押えた。

「……どうやらこれで着陸ポイントは決まったようだね」

細い金のブレスレットの光る右手が操縦桿に、ごついリスト端末で飾られた左手が噴射制御レバーにのばされていた。無数のモニターやタッチパネルがウオーターベッドに支えられた彼女の身体をぐるりと取り囲み、そのうえ心電を始めたとする代謝測定のための各種センサーに身体中絡みつかれて、カシルは機械装置のなかになかば埋もれた格好だった。これから数時間の間、彼女は『サガ』の姿勢制御装置、核融合システム、それらに接続された複雑な噴射機構と格闘しながら、この総重量千トンの着陸船を惑星表面まで降ろさなくてはならないのだ。

「このランディングは銀河系中のどんな惑星への降下よりも難しい仕事であると正しく理解してほしいものね」カシルは言った。

「なにしろ一Gの表面重力のくせして、制動に使う大気が全然ないときてるんだから……」

「……しかも相対速度は秒速七十キロ以上だ。もしも目標地点の千キロ以内に降りられたらご褒美をあげてもいいな」

「その言葉忘れないでよ」

「二言はなし、楽しみにしているんだね。……ありや、しまった。クレジットカードを家に忘れてきたかな……」

「また……、ウィル……。おどけてないで。……わたしの腕を信じないの」

「……どうして?」

「あなたがそんな冗談を言うのは何か不安を感じてるときだから……」

「誤解するなよ、きみは百パーセント信頼してるさ。心配なのはこのボロ船のほうだよ」

「まあ、わたしがこの駄々っ子をどう扱うか見ていなさい
つて」

「やれやれ……改装費用をけちるんじゃないな」

「有り金はたいたくせして、何言ってるの……」

ウィリアムは観念して目を閉じた。カシルはにっこり笑って左手をのばし……。核融合エンジンが三Gの加速度で制動を始めた。

5 船外活動

一歩外へ出たウイリアムは自分が金属光沢をはなつ巨大なパラボラの上にいるのを知って一瞬、『サガ』にあの光を送った反射鏡の真上に偶然着陸してしまったのに違いな
いと考えた。しかしすぐに彼はそれがランディングのための強力な噴射が塩の大地に穿った皿型の凹地であることを理解した。……耳をろうする轟音と息をするのも困難な圧力のために、彼は着陸に際して船の周囲で起こっている出来事にはまるで気づいていなかったのだ。いま彼がその上に立っている眩しく光る銀白色の物質は、純粋なナトリウムの微細な金属粒子と水素化ナトリウムの針状結晶の混合物であり、高速の陽子にたたかれた塩化ナトリウムが瞬間的に分解し、生成されたものだった。恐らく『サガ』はランディング地点から猛烈な勢いで四方に吹き出されるヘリウムと塩化水素の混合した緑黄色の旋風とともに降りたつたことだろう。帰艦するときにはエアロックを念入りに空
気洗浄しなければならぬはずだ。

彼がそうして明るく照明されたエアロックの外に突っ立っている間にカシルはまだ熱を持っているナトリウム溜まりを巧みに避けながらクレーターの脆い斜面を登っていた。彼がその後を追って歩き出したころには彼女はすでに補助照明灯をクレーターの縁に設置して前方の闇のなかへその

光をはなっていた。

「何が見える？」 ウィリアムはようやく彼女に追いつき、自分の照明灯の光を彼女のそれにつけ加えた。カシルは両手を腰にしばらく仁王立ちしていたが、やがて無言のまま闇の彼方を指さした。

「向こう側の崖ね。……かすかに見える」 彼には見えなかった。

「目が慣れるまで少し時間がかかるわ。右の明りをもう少し下に向けてくれる？」

彼はそのとおりにし、二人の前にひろがる夜の平原を照らし出す低い光源を調節した。

「ここから約十キロ……。昼間だったらきつと手で触れられるぐらいの距離に見えるはずよ」

彼らは着陸地点としてかつての海溝の底、幅がおよそ六十キロほどの平坦な部分を選んでいた。というよりもあの『光』がふたりにそれを選ばせたのだ。しかし少なくともここからは、彼女が見たというそれを説明するようなものは何も見えなかった。

「……何もないわ」 彼女は残念そうに言った。

「あれだけのエネルギーなんだから、何かの痕跡を残していてもよさそうなものなのに……」

ウィリアムはすでに何事も決めつけまいと決心していた。「もう少し詳しく調べなくちゃ何も言えないさ。……例えば

ばあの陰が始まるあたり」彼は左手の方向を指さした。

「あの地表の感じは妙な具合だな……」

「……待つて」ウイリアムが背負った大きな荷物とともに歩き出そうとするのをカシルは止めた。

「まだこの星に名前をつけていなかったわ。いま特権を行使させてくれる？」

「もちろんいいとも」

彼はそこに立ち止まり、カシルがゆっくり身体を一回転させて周囲の単調な景色をその目にやきつけるのを辛抱強く待った。彼女はしばし沈黙し、やがて背筋を伸ばすと厳かに言った。

「……わたしカシル・セイジはここに汝を『キュアレス』——回復の見込みなし』と命名する」

「ふーん。……違いない」

照明灯がなげかける光芒を背にして彼らはクレーターの縁を下りた。そしてそこでお互いに背負っていたものを下ろすのに手を貸しあった。折り畳まれたそれは簡単な操作で展開し、ワイヤーで編まれたタイヤをもつ小さな自転車になった。……サドルにまたがると二人は冷たい夜の闇に沈む平原に向かってペダルをこぎ出した。

二十分ほどのサイクリングの後、彼らはその地形の縁に到着していた。

「いったい何？　これは……」

ウィリアムには答えられなかった。岩塩の大地の上に地表の盛り上がりが延々と続いている。幅は約百メートル、外側の縁の高さは人間の腰ぐらいあるがどうやら中央に行くにつれて低くなっているらしい。まるで何かが塩の岩盤を内側からむりやり持ち上げたかのように、いちばん外側は地表から剥がされたままの大きな岩塩の板できていた。「平原のなかをずっと続いていくようね」

彼は身を起こし左右を見渡した。確かに照明灯の光とどく限りその『土塁』は一直線にどこまでも続いていく。

「上空を通ったときには太陽が真上にあつてはつきりしなかったけど……。まるでモグラが掘った跡みたいだな……」

「だとしたら地球にいた仲間の千倍はあるやつよ」

「……堆積した塩が岩盤を形成する過程でできたものかも知れない」

「でもこれだけまっすぐなのも変じゃない？」

ウィリアムはさじを投げた。「わからないな……。どうやら、こいつをずっとたどって行くと海淵に行き当たりそうだね」

「海溝のなかのさらに深い谷ということね。そこで何か手掛かりが見つかるかも知れない。行きましよう」

二人の影が長く延び、遥か彼方の岩のうえに小さく揺れ

ていた。着陸地点がこの海淵の縁からわずか一キロたらずの位置であるというのは、パイロットとしてのカシルのなみなみならぬ腕前を示していた。おかげで崖縁まで数分の行程ですむことをウイリアムは妻に感謝した。……何といつても完全装備の宇宙服というものは無重力状態かせいぜい小惑星程度の重力環境のなかで使用することを想定して作られている。一Gの重力のなか重い生命維持装置を背に、与圧のために自由のきかない身体でペダルをこぐというのはちょっとした曲芸にも似た試練だった。

そうして新世界最初の上陸者たちは『土塁』に沿つてのんびりと進んだ。海淵の縁が間近になると彼らはさらに走る速度を落とした。……堆積した塩はちょうど氷河の上に降り積もった新雪のように海淵の上を覆っているから、うっかり車輪が踏みぬいたら地の底まで墜落することになる。事実そうした崩落の跡がすぐ目の前にもあった。照明に照らし出された白く輝く平原に突然差し渡し七、八百メートルある弓型の真つ暗な穴がぼつかりと開いていた。崖縁の位置を教えてくれるという意味で崩落があることは幸運だった。少なくともそこまでは安心して進めるということだ。

「用意はいいかい？」

息をはずませ、腰の物入れから不格好な信号銃を取り出しながらウイリアムは尋ねた。背後からの照明は遠い山脈

を仄暗く照らし出すほどの性能があったが、ほぼ真空に等しい大気のなかでは拡散することもなく、海淵はまだ完全な暗闇のままだった。カシルは傍目に見ても緊張していた。彼女が電子スコープを構えるのを横目で確認して彼は照明弾を発射した。反動を感じてから数秒後、眩しい光が炸裂して足許から始まる海淵の全景をすみずみまで照らし出した。照明弾は数十秒のあいだ輝き続け、彼らには目の光景を観察するために十分な時間があつた。

カシルはその谷に自分の見た発光現象の説明となる何かを求めていた。……たとえ夫がああ言ったとしても、人工的な機械装置か、あるいはそれらの痕跡を見ることを半ば彼女は期待していた。……現実に『光』は存在したのだし、その独特で強烈な印象からも、どうしてもただの自然現象とは思えなかつたのだ。

一方、ウィリアムも自分の妻が彼女が夢うつつのうちに見たものを現実と混同していると思いたくなかつたから――そんな錯誤はまかつたくふだんの彼女らしくもなかつた――その体験をうまく説明する何かを求めていた。……彼はこの谷間にできて間もない新しい隕石口を発見することを密かに予想していたのだ。それは彼女の見た鋭い光をうまく説明した。……秒速十キロ程度で地表に衝突した小隕石の運動エネルギーは熱へ転換する過程でスペクトルのすべての波長で強烈な光を発するはずだ。

しかしふたりの予想を裏切って谷底にはそうしたものは何一つなく、そのかわりに思いがけない眺めが用意されていた。

二人は同時に感嘆の声をあげた。幅が四キロほどある海淵はまるで大理石づくりの壮大な古代都市の廃墟だった。無数の塩の柱——それらは恐らく海水がゆつくりと蒸発する過程で形成されたのだろう——が谷の両側を埋めつくしていた。比較的緩やかな崖は階段状に重なる無数のテラスから出来ていて、柱とテラスによる複雑な造形が幾度も繰り返されながら遥か下方へと続いている。……それらは強烈な光に照らし出されて純白に、あるいは淡い黄色、あるいは鮮やかな青緑色に、そして一部では信じられないほど深い藍色に輝いていた。

「うわお。……なんて綺麗……」

「信じられないな、あの色は……。海水中のミネラルが析出したんだろうけど、それにしても……」

荒涼としたれん獄の底に秘められていた思いがけない自然の造形に心打たれ、彼らは肅然として目前の光景を見つめていた。この世の誰一人、いままでこれを見たものはいないのだ……。

やがて光は消え、鮮かではかない夢の世界はふたたび闇に沈んだ。

「……あの光。原因になりそうなものは見えなかったわね」

長い沈黙の後、カシルはつぶやくように言った。

「ああ」 ウィリアムは本人以上に当惑していた。彼女の見間違いでないというなら、あの発光現象の原因としてほかにどんな説明が考えられるだろう？

「もう一度やってみよう。今度はあちらの側から見てみないな」

彼らは崩落の跡を大きく迂回しながら左手の方向に回り込もうとした。カシルは彼女の自転車を『土塁』の縁においてからそこを登り、内部の柔らかい隆起に足をとられて転びそうになった。

「気をつけて。思ったより頼りないから」

ウィリアムは慎重に跨ぎこしながらこの地形の構造をじっくり観察した。

「……周辺から真中にいくにしたがつて徐々に破片が細かくなっているみたいだ」

彼らはもろい岩塩を砕きながらよろめき歩き、中心に近いくところまで立ち往生した。そこは流砂のように細かい塩の粒子が溜まっていてそれ以上は進めそうもなかった。

「まるでテーブルソルトだな」

彼は空の密閉ケースを取り出してサンプルを採集しながら突然気づいたように言った。

「この地形を可視光以外で見えてみた？」 カシルは首を振り、

電子スコープを調整してから一覗きして驚きの声を上げた。「……赤外線をはなってるわ!」

ウィリアムは眉をしかめた。……温度が高いって?

「放射線は?」カシルは手首のゲージを見て首を振った。

「バックグラウンドレベルを差し引いて……ゼロ。放射能はないわ。どうということかしら?」

ほっとしたものの、彼はすぐに新たな疑問につきあたった。

「とにかく温度を計ってみよう」

カシルが温度計を取り出して幾つものセンサーを塩粒に差し込むのを見ながらウィリアムは考え込んでいた。どこから熱が来るのだろうか? ……地熱か? ここは海溝なんだからそれもおかしくはないが、しかし、この惑星の地表のすぐ下に熱いマグマ溜まりがあるとはとても思えない。

彼はいま垣間見たばかりの海淵の内部を思い起こしていた。……あんな見事な造形が残されているからには活発なプレート活動なんてあるわけがない。にもかかわらず、確かに熱はどこかで産み出されているのだ。

考えあぐねて身を起こし、彼は左右に『土塁』の続く先を眺めた。……次第に暗闇へと溶け込んで行く平原の彼方から完璧な直線がやってきて左手十数メートル先で崩落によって断ち切られている。……この淵の向こう側にもやはりこいつは続いているのだろうか?

海淵のむこう側を眺めてもはっきりしたことはわからなかったが、そうであってもおかしくはない。……いずれにしても数十キロ先でこの塩の平原は海溝の大陸側の崖につきあたるはずだ。『土塁』はそこまで続いているのかも知れない。

彼は遠くに目をやり、かすかにその断崖が見えたような気がした。錯覚だろうか？ それとも暗闇に目が慣れてきたのか？ ……いや、確かに見える。地平線のあたりの明るい空を背景にしてうつつすらと黒い山嶺が続いているのが……。

明るい空だって？ 大気がないのに……。しばし彼は不審に思い、やがて納得した。日没からはそれほど時間がたっていない。つまりあれは黄道光——つまり黄道面の星間物質が主星の光を反射して輝いて見える光なのだ。今、そのぼんやりした光の帯は彼らがいま調べている『土塁』の続いている方向にぴったりと一致していた。

……恐らくただの偶然だろう。それとも……？

彼はまだ手に持ったままのサンプルケースに目をもどした。そのなかの岩塩の粒子はまるで石臼で挽いたように細かかった。彼のなかでいろいろな断片が合わさり、ひとつの絵ができかかっていた……。

「……かなり高いわ。夜は地表はマイナス百五十度を下回るだろうに……」

はっとして彼はカシルを見た。

「カシル……」

夫の口調の妙な響きが彼女を振り向かせた。

「いますぐここを離れたほうがいい」

宇宙服姿が両手を広げた。なぜ……？彼は緊張した声で言った。

「いいから、早く。……温度計なんてほうっておけ！」

彼女はわけのわからないという様子で、それでも彼の真剣な様子にただならぬ何かを感じとって、その言葉にしたがった。

「どうして……、こんなに……、いそぐのっ」

不規則に積み重なった岩塩の板のあいだを苦労して飛び移りながらカシルは尋ねた。『土塁』の縁を滑り降りたウイリアムは返事もせず彼女をひっぱり下ろし、それから二人はサドルにまたがってまるで縫いぐるみのテディベアがサーカスの自転車乗りの演技でもしているかのように、ゆらゆら並んで走り出した。

「……どうまで、……いくのよ」

ものも言わずに走り続ける夫の後ろ姿に息をきらしながらカシルが声をかけた。ウイリアムが遅れた妻を振り返り、返事をしようとしたその瞬間、突然、周囲の山々が輝き出した。……幅六十キロのこの海溝に臨むすべての斜面をまるで真昼のように照らし出して、目をくらませる白熱した

光がそこに爆発したのだ。

いままで暗闇に慣れていた彼らにとって、その突発的な明るさは現実の肉体的苦痛ですらあった。ウイリアムはフェイスプレートを腕でかばいながら叫び声をあげた。……何も見えない。光は強く、なおも強くなっていった。眼をしつかりと閉じているのに瞼を通して血管の赤い編み目が見える……。彼は手探りしてバイザーを下ろしたがほとんど効果はなかった。いまや彼らの世界のすべては強烈な青白い光に満たされていた。

彼の足許の大地がまるで生き物になったかのように身動きし、そしてふいに起き上がった。気がつくとうイリアムは何もない空間を『落下』していた。カシルが恐怖の悲鳴をあげるのが遠く聞こえ、青白い光が残像を残し、……そして突然すべてが消えた。

ウイリアムは岩塩の平原に倒れていた。すぐに起き上がるろうとしたが完全装備の宇宙服と一Gの重力がじゃまをしてなかなか成功しなかった。幾度かすべったすえに彼は片膝をついて身をおこし、周囲を恐る恐る見回した。最初は何も見えず、彼は視力を失ったのかと慄然としたが、やがてバイザーが下りたままになってるのを思いだした。それを上げて数回目をしばたいたいているうちに——マシンよ！ 感謝します——ようやく周囲が見えてきた。

数メートル離れたところに宇宙服が横たわっていた。ぴくりとも動かない。まるで外界の冷気が直接流れ込んだかのように、彼はみぞおちが冷たくなるのを感じた。駆け寄ろうとしたが『土塁』の柔らかい地面がじゃまをしていた。……何ものかが彼らを数百メートルにわたって『引き戻した』のだ。彼はよろめき、何度かぶざまにころがった。

カシルのそばによるまで彼の頭は空白状態だった。しかし宇宙服の腕がわずかに動いているのを見た瞬間に全身がとめどなく震えだすのがわかった。おののく手袋で彼女のフェイスプレートの埃をはらう。それがひび割れたりしていないことを確認して初めて、彼は大きく息をついた。

「カシル……、カシル。大丈夫か？」

彼女の口から小さなうめきもれ、彼女は身を起こそうとしてもがいた。ウィリアムは手をかして引き起こし背後から身を寄せてささえた。その場で彼女の生命維持装置を肩ごしに素早くチェックする。……異常なし。ほっとして力が抜けそうになり、もうひとつ大切なことを忘れていたことに気づいて彼はもういちど、今度は放射線カウンターのゲージを確認した。「ゼロだ……」彼はカシルのかたわらに思わず座り込んだ。……どうやら生き延びたらしい。それから支えを失ってまたころがってしまった彼女に気づく。船まで抱き上げていきたいところだったがさすがにそれは無理だった。彼は妻の身体を下から抱き抱えるように

して一緒に立ち上がった。

「ガンマ線はあびていない。……運がよかった」彼はつぶやくように繰り返したがカシルはまだ答えられる状態ではなかった。

「身体半分、青あざだらけなのに『運がいい』ですって」
ウィリアムもそれとたいして変わらぬ状態だった。

「そうとも。脳波にも異常はないようだ。……三百メートル以上も滑落してこんなものですねなんて、奇跡としか思えないよ」

「痛……。『滑落して』ですって？」診療ドックのなかで湿布を貼ってもらいながら彼女はようやく正常な反応を取りもどしていた。

「平らな土地でどうして滑落できるのよ？」

「その証拠にきみの自転車のホークはぐにやり曲がったよ。……きつと『土塁』がクッションになつて衝撃を受け取めてくれたんだろう。あんな至近距離であいつに遭遇しながら軽い脳震盪だけとはね……」

「あいつ』って？」

カシルはどうやら自分よりウィリアムのほうが正しく事態を把握しているらしいと気づいた様子だった。

「もう大丈夫……」彼女は夫の手を押し止めて湿布のパックを奪いとった。

「今度はあなたの番よ」

「ぼくは平気だよ。……あ痛っ」

「……強がりはおよしなさい。それより、あの『光子魚雷』

について早く説明してほしいんだけど」

『光子魚雷』……?』

「あなたホロシアターを見たことがないの? ……わたしはてつきりクリンゴンの宇宙戦艦に攻撃されたんだと思っ
たわ」

「ああ、なるほどね……。じゃあ見たんだ。あの光を……」

カシルは重々しくうなづいた。

「最初、あなたの背後が明るく照らしだされたわ。振り向くとあの山脈の中腹に眩しい発光体があった。それがすごいスピードでこちらへ近づいてくるのが見えたわ」

ウィリアムは感心した。「ふーん。いい目をしてるね。ぼくはただ眩しいだけだった」

「目がよくなきゃパイロットにはなれないわ。あの正体はなんだったの?」

「……月さ。この惑星の」

カシルの表情はそれを彼の冗談のひとつと思っ
ていて、とを示していた。

「本当だよ。……周回軌道上を動いているという意味で、
本当であればこの惑星の衛星なんだ」

『周回軌道』ですって? 地上十メートルの高さの?」

『地下』だよ。ここが海溝の底なのを忘れちゃいけない」

「……一体どういう意味?」

「つまり、あれは人類が遭遇した最初のマイクロ・ブラッ

クホールだったってことさ」

ふたりは遅い朝食を食べ、熱いコーヒーの注がれたマグカップを手にくつろいでいた。……一Gの重力と手堅い朝食があれば人間はどんな環境でも幸福になれることを彼らは証明していた。

「……あれが星系外からやってきたとは考えにくい。そんな放浪者が『キュアレス』の衛星になるなんてそれこそ奇跡的な確率でしかないからね。たぶんこの星系が誕生したときからこの空域に存在していたんだろう。原始の星雲ガスといっしょに回転しながら」

「それなら初めから主星の核に含まれていそうなものなのに。ブラックホールはどんな水素原子よりも重いんだから」
「すでに実例ひとつを発見した以上、この宇宙にはマイクロ・ブラックホールがたくさん存在していると考えるべきだろうね。ひよつとしたら、あらゆる恒星の内部には複数のマイクロ・ブラックホールがあるのがあたりまえなのかも知れない。たまたまそのなかのひとつが惑星軌道に残っていたんだとしたら……」

「……大胆なご意見ね。それでもそれが単独で存在する必然性はないでしょう。どれかの惑星の内部におとなしくおさまっていたっていいじゃない」

「おさまっていたんだろ、きつと。……小惑星のひとつの

中に何億年もね。でもある日そいつがべつの小惑星に衝突した。小惑星はばらばらに分解して、その衝撃でブラックホールが裸で漂い出したんだ」

「見ていたみたいなのを言うのね」

ウィリアムは赤面した。「あくまで仮説だよ。でもそう考えれば納得できる」

「そいつがたまたま『キュアレス』に捕われたってわけ？」

『月』がそうであったようにね」

「それは引用符つきの『月』ね。古き良き地球の……あなたはジャンアント・インパクト仮説は支持していないのね」

「いかにも。しかし『月』とは違って、この衛星の公転周期は惑星の自転よりもかなり早かった。そして、それが悲劇の始まりだったんだ」

『悲劇の始まり』ですって？」

ウィリアムは言葉をとめ、一瞬遠い場所を見るような目つきをした。

「……想像してごらんよ。『キュアレス』は暖かな大気と豊富な水に恵まれた地球そっくりな惑星だった。『イシユタルの機械』が播種したシアノバクテリアは酸素を放出し、珊瑚虫は大気中の二酸化炭素を固定した。何億年もの間、そこは地球生態系を移植されるのを待つだけの楽園を約束された土地だったんだ」

「しかし、いつまでまっても『イシユタル』は戻ってこなかった……」

「そう。レトロコンピュータウイルスが『機械』たちのメモリーを書き換えてしまったからね。ほとんどの『イシユタル』たちは機能を停止し、わずかなものたちが『イルスター』——『狂った機械』になった。『キュアレス』は忘れ去られ、数十億年の時が流れた。そして、ある日ブラックホールが……」

「だから、なぜそれが『悲劇』なの？」

「……潮汐作用だよ。マイクロ・ブラックホールの質量は小さいけれど軌道が十分小さければ大きな潮汐効果を及ぼす」

カシルははっとした表情をした。

「潮汐力は距離の三乗に逆比例するんだったわ……」

「ブラックホールは『キュアレス』の大气と海水を軌道運動方向に引きずろうとし、惑星の自転はそれにブレーキをかける。『月』のように自転速度がまさる場合、潮汐作用は衛星を加速して軌道半径を増す方向に働くだろう。しかし逆の場合は……」

「衛星は次第にエネルギーを失い、軌道半径は減少する……」

「通常の小惑星ならまずロシユの限界で粉碎され、それから破片のほとんどは大气との摩擦で燃えつきてしまう。い

くつかは地上に落下してくるかも知れないけど、惑星全体の環境にとつては何てこともない。……でもマイクロ・ブラックホールの場合はそうはいかない。何しろこいつは原子レベルの大きさしかないんだ……。上層大気の密度なんてほとんど真空と同じさ。たぶんブラックホールの進路上に空気分子が存在するのは、われわれがアステロイドベルトのなかを飛んでいてたまたま小惑星のひとつに衝突するぐらいの確率だよ」

「ごくたまに軌道近くの酸素やオゾンの分子を取り込むだけでしょうね」

「小惑星程度の質量が気体分子に及ぼす引力の大きさを考えれば当然そうなる。しかし一方で軌道の周囲数センチの分子にかぎっては、ほとんど瞬間的にブラックホールに落ち込むはずだ。……何しろシュヴァルトシルト半径――

『事象の地平面』にま近い重力勾配なんだから。気体分子を取り込むことによる質量の増加は軌道要素そのものは変えない。でも潮汐作用は増大する。潮汐力のブレーキによってブラックホールはじょじょに軌道を下げ、餌食となる気体分子の豊富な大気の底深くに入っていく。そこではすでに一立方センチあたり数十万個から数億個の密度で気体分子が存在する。……比較的短い時間――おそらく数百年のオーダー――のうちに『キュアレス』の大気はほとんどブラックホールにすいこまれてしまっただろう」

「……かわいいそうな『キュアレス』！」

「気圧の減少とともに海水は沸騰し蒸発する。……後に岩塩の砂漠を残してね。水蒸気は紫外線で分解され、水素は金星でそうだったみたいに宇宙空間に逃げていく。そして遊離した酸素は岩石を酸化するか、あるいはブラックホールに飲みこまれるかのいずれかの運命をたどる。後に残るのは……」ウィリアムは窓の外の荒涼とした景色のほうへ手を振った。

「おう……まい……ましん」カシルはつぶやいた。

高速で移動する眩しく輝く点を、二人は安全な距離まで移動した『サガ』の展望窓から眺めた。

「……七秒半ちよつと。海溝の幅が六十キロほどだから、秒速八キロ弱だな……。ここから見ているとまさに光子魚雷だね。……きみは惑星本体だけでなく、はからずもその衛星にも命名したってわけだ」

「……でも『衛星』の存在を最初に予想したのはあなただわ。命名の権利をゆずってもいいわよ」

「いや、いいよ。海底を慕進する衛星にとって『トーパード』って名はぴったりなもの。きみはどうやら名づけ親の才能があるらしい」

「ありがとう。代わりに衛星の領有権をあげるわ」

「そりゃありがたい。マイホームに庭が欲しかったんだ」

二人が一緒に声をあげて笑ったのは久しぶりだった。

「……質量はどれぐらいあるの?」

「きみをあんなに投げ飛ばせたんだから、ぼくよりずっと重いよ」

「真面目に答えなさいよね」

「そうだな……。五掛ける十の二十一乗グラムぐらいかな」「なにそれ?」

「……キュアレスのかつてあっただろう大気全部の重ささ。ぼくらがここに無事こうしているんだからそれよりずっと重いとは思えないし、また極端に軽いはずもない」

「あれより重ければずっとひどいことになるのはわかるけど、軽くても危険があるというわけ……?」

「もちろんそうだよ。普通マイクロ・ブラックホールは何億度って超高温でいろんな素粒子を輻射しているんだから」

「それって『ホーキング効果』のことを言っているの?」

「そう……。だからこそ最初はふたりともひどく放射線を浴びたんじゃないかと心配したんだ。でも、あいつが出していたのは比較的波長の長い電磁波とニュートリノだけだったようだ。もしも十億トンぐらいの小さなやつだったら、いまごろぼくらはガンマ線で骨までこんがり焼かれていたろうよ」

「運がよかったわ」

「運だけじゃないぜ。ぼくが気づくのがもう少し遅かったら……。軌道の真下の岩がこなごなになっていたのは見ただろう？　もしもあの場所にいるときにブラックホールがやってきていたら数十万Gの潮汐力でミンチになっていたところだ」

「それじゃミートローフにならないですんだお礼をするべきね」

ふたりは互いの無事を祝福して——型通り——異星の景色を見下ろす宇宙船の窓の前で抱きあいキスをかわした。

「……む。ところで、さつき領有権とだけ……」

「冗談よ」

「いや。ぼくは本気であるのブラックホールの所有を申請するつもりだよ」

「なんですって？」カシルはウィリアムの抱擁をほどいた。

「どうして？」

「……他ならぬきみのためでもあるんだぜ。このやくざな

『シーカー』稼業ももう終わりだ。ほっとしただろ？　ぼ

くらはクレイドルに戻り、新しい事業を始めるんだ」

「ウィル……」

「今度は準備をしてあいつを採りに来るつもりさ。クレイドルに戻ったらすぐに……。考えてご覧、唯一人間が見つけたマイクロ・ブラックホールだよ。どれだけの利用価値があると思う？　安価な核融合。重力波発生装置。あるいは

タイムマシン通信装置。みんなが飛びつくような無限の可能性があるんだ」

「ウィル、きいて」

「まずあれを帯電させなくちゃならない。……初めは水素イオンを食べさせればいい。この船の噴射だっていいんだ。電荷の反発力が重力のそれよりも大きくなってきたら陽子加速装置の出番だ。そして十分帯電させたところでマス・ドライバーで軌道を持ち上げる」

「ねえ、ウィルってば！」

「それから『機械』の電磁スクープで支えながら加速すれば……。うっ、何だい……?」

衿もとをつかまれ、ウィリアムは彼女の目を見た。

「あなた、わたしがこの旅にいやいや参加したと思ってるんじゃない」

一瞬、彼は女性ならではの論理のワープにかえす言葉を失った。

「……そうじゃないの?」

「それはあなたの誤解よ」

「でも……」

「確かにこの冒険を最初に言いだしたのはあなただわ。研究室をやめて新しく始めた仕事もうまく行っていないかったときあのパンフレットが送られてきたのよね」

「ああ」

「……でも協会は営利事業団体ってわけじゃないのよ。『シ
ーカー』は政府による失業対策の意味合いが強いのに」
「知ってるさ」

「それがわざわざあなたのところの名指しで電子メールを
送ってくると思う？」

ウィリアムは愕然とした。「てことは……？」

「わたしが取り寄せたのよ。内緒で」

「何だって？」

「あなたには事業は無理だと思ったの。……自分自身で動
くのが好きで、決して人の上に立つタイプじゃないのよ、
あなたは。ごめんなさいね、こんなこと言って」

「……知らなかった」

「秘密にしていって悪かったわ」

「だけど……なんで……？」

「……大学をやめたあなたを見るに忍びなかったから。す
っかり元気がなくなってしまっ……」

ウィリアムは椅子の背もたれを手探りし呆然と腰を下ろ
した。

「ショックだったみたいね」

ずいぶんたってから彼は尋ねた。

「……いまになって言うのはなぜだい」

「あなたのためにもう一度宇宙に出たんだ、と思っていた
わ。自分がクレイドルの生活を犠牲にすることと引き替え

に、あなたの生き生きとした姿を見ることができたんだと思っていたの。でもそれはわたしの自惚れだったわ」

カシルはキュアレスの暗い空を見上げた。

「自分自身のことがかかったの。どうやらわたしは『飛んでる』ほうが好きなんだって……。確かに友達のみんなとの——いくら抗老化剤の力を借りても、みんなとつくの昔にお婆さんになって死んでしまったでしょうね——気のおけない世間話も懐かしいけど……」

彼女はウィリアムを振り向いた。

「あの夜あの『光』を見た時、とても強くて、しかもなぜか懐かしい気持ちを感じたわ。まるで何か心奥深くへ呼びかけているような……。そして、あの谷間を一瞬の明かりのなかに見た時にも、魂をゆさぶられるほど感動したことを覚えている。たぶん理解してもらえないかも知れないけれど、何て言うのか、……。自分のために宇宙がこの驚異を用意してくれていたんだ、ってなぜか突然確信できたのよ。そんな大切なチャンスを見過ごして、何一つ知ることもなくクレイドルで満足しているなんて……」

カシルは大きく首を振り、ウィリアムは初めて知る妻の素顔にただ深いスリルを感じていた。

「そんなのは犯罪的怠慢だわ！」

「驚いた。きみがそんな……」

「……らしくない？　でしようね。わたし自身、快適な都

市の生活やサイラシンの自然を捨ててまで『シーカー』なんて職業を選ぶ人達の気が知れないって思っていたんだから」

「よくクレイドルを懐かしがってたじゃないか」

「そうだったわね。……でも、いまは違う。それらを犠牲にしてもなおひきあう何かがあるってわかったの。あるふつとした瞬間、……小さくて無力な自分が、広大な宇宙のなかに暖かく組み込まれているって感じることもあるのよ。バツサード・ラムジェットを限界まで駆動して『機械』を最高速度で走らせたときにも、それを感じていたわ。わたしはいま不滅の神々のなかの一人であると……。そのときわたしはカシル・セイジであることをやめて、何かまったく別のものになるの。……天空に広げた電磁スクープの帆が真珠色の光を帯び、星々の間に何億キロメートルの長さのプラズマの尾をひいて……。そうよ、そのときわたしは永遠のなかを天駆けるの……」

夫の背後の、はるか彼方を見つめながらそう言う彼女の顔は、まるで深い性的陶酔のただなかにあるかのようにつややかだった。

「そのとき確かに知ったわ。わたしという存在はもう決して滅びることがないって……。今こそ自分はすべての意味、すべての力につながるひとつの道のうえにいるって……。だから……そう、あなたのためじゃなかったの……。この

旅はわたし自身のためだったんだわ。……あなたはなにもわたしに引け目を感じる必要はないのよ。わたしこそあなたをこれに巻きこんだのももの」

……なんて逆転劇だ。イニシアチブをとっていたのは彼女で自分じゃなかったのだ。

「……怒った」

「いや、ただ驚いただけ……」

まるで無重力状態のなかで磁力ブーツをはいているような歩き方でウイリアムは給食システムの前まで行き、カップにホットミルクを注いだ。

「……考えて見たら、いずれにしてもブラックホールの事業化は無理だ」

彼は力なく言った。

「あの『土壘』が熱を持つてたのを覚えてるだろ……。潮汐摩擦だよ。岩石の応力が急速に運動量を奪って行くから『トープード』は数週間単位で軌道半径を減らしていく。このつぎ戻ってきたときにはもう大地の奥深くを周転しているに違いない。数年後にはこの惑星の核に落ち着いていることだろう……」

「……残念だったわね。クレイドルに戻れると思ったのに」「そうだね……」

自分の就眠カプセルに向かってとぼとぼ歩いていくウイリアムの後ろ姿をカシルは心配そうに見守っていた。あの

人、
まさか冬眠しちゃうんじゃないでしょうね……。

7 時代遅れのラブソング

カシルが離陸準備が完了したことを知らせに上がって来た時、ウイリアムは展望窓から惑星の最後の眺めを目に焼きつけていた。

彼女は脇に立ち、夫の腰に腕をまわして一緒に景色を眺めた。

「これ……」ウイリアムはそのままの姿勢で一枚のカラー・プリントを肩越しに彼女に手渡した。

「何……？ ああ、『トーピード』ね」

高感度カメラが超高速で移動する発光体を画面中央に静止させていた。

「衛星の領有権はぼくにあると言ったね」

「そう言ったけど、もう事業化の話はやめにしたんでしょ」

「……そうじゃなくて、ぼくのものならきみにプレゼントできるだろ？」

「わたしに衛星をくださるの？」

「いや、衛星じゃない。ぼくがあげるのは宝石だよ」

『宝石』ですって？」

ウイリアムは彼女を振り向いて笑った。

「綺麗だろ」カシルはプリントを見つめた。

「そうね……宝石だわ。どんなダイヤモンドよりも数段きらめいている」

「そしてどんなダイヤモンドより貴重で、しかもグラビティ
イ……厳肅だ……」

「……ありがとう。でもなぜ……?」

「古い習慣なんだけど……、むかし地球ではよく夫婦が結婚してから何十年といった節目の年を祝ったものなんだ。

……例えば二十五年目が銀、五十年目が金、そして六十年目がダイヤモンド……」

「まあ」カシルはちよつと頬を赤らめた。

「ぼくらは結婚してサイラシン時間でちようど二百年目になる」

「結婚記念にブラックホールを妻にプレゼントするなんて、まったくあなたらしいわ。……ほんと、いかにも時代遅れのやりかたよね」

「気に入らないのかい?」

「逆よ……。とつても気に入ったわ」

カシルは夫に黒くつややかな髪をあずけ、それよりは少し明るいウィリアムの指がそれをやさしく愛撫した。

そして天頂で『オミクロン・ディフェンダ』がフレアをあげるなか、核融合エンジンのまばゆい噴射は東洋人の女と黒人の男を乗せた船をその輝きめがけ空高く押し上げていった。

じだいおくれのらぶそんぐ
時代遅れのラブソング

2001年12月8日 第1版第1刷発行

著者 高本淳 (Jun Takamoto)

発行人 中条 卓

発行所 アニマ・ソラリス

URL <http://www.sf-fantasy.com/magazine/>

制作 松谷 和加子 (電脳工房りっくらっく)

表紙 三上 央子 (電脳工房りっくらっく)

本書の文章及び図面、イラストに関しては一切の無断転載を禁止させていただきます。
希望される場合はメール (master@sf-fantasy.com) にてご相談ください。

著者紹介

高本淳 (Jun Takamoto)

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/novelist/j-takamoto.shtml>

作品紹介

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_1/lovesong/index.shtml

著作：ポルツマンインターセクション

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_s/takamoto/boltz.html

あるいはドワーフでいっぱい宇宙

http://www.sf-fantasy.com/magazine/novel_s/takamoto/dwarf.html

天の炎

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/anthology/mirror/takamoto/index.shtml>

シェアードワールド：落下前

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/shared/before/scenario.shtml>

シェアードワールド：落下当日

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/shared/that/scenario.shtml>

シェアードワールド：落下後

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/shared/after/scenario.shtml>

シェアードワールド：遠い明日…

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/shared/other/scenario.shtml>

中央海嶺 12/24/2005

<http://www.sf-fantasy.com/magazine/shared/that/ridge.shtml>